

ライマン・コレクションを訪ねて

鈴木尉元¹⁾・小玉喜三郎²⁾

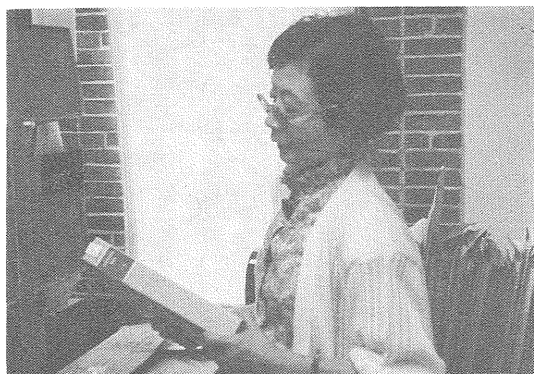
まえがき

ライマン (Benjamin Smith Lyman) といえば、ナウマンとならぶわが国の地質学の草創期に活躍したお雇い外国人で、日本の地質学に大きな貢献をした大恩人の一人である。彼は1872 (明治5) 年に来日し、1881 (明治14) 年に帰国したが (今井, 1966), この間の彼の足跡は、北は北海道から南は九州にまで及び、その間に多くの弟子を育て、晩年にいたるまで彼らに慕われたことでも知られている。その後弟子達は鉱業界などで活躍し、ナウマンともどもその業績は高く評価されている。なお、弟子のうち西山正吾と坂市太郎は、ともに1882 (明治15) 年から1887 (明治20) 年まで地質調査所に在職し、優れた業績を残している。

ライマン自身の業績は、北海道の地質調査をおこない、その成果をまとめ、日本での最初の広域地質図、200万分の1蝦夷地質図を出版し、新潟県など産油地の調査を行ない「日本油田之地質及び地形図」を出版したことなどが知られているが、わが国には、わずかな資料しか残されていないといわれている。彼の残した蔵書や調査資料などは、彼の生まれ故郷であるマサチューセッツ州ノーザンプトン市のフォーブス図書館とマサチューセッツ大学アマースト校の図書館、フィラデルフィア市にあるアメリカ哲学協会などに保管されているといわれている。

このうちマ大学にあるものは、フォーブス図書館にあった日本関係のもので、同大学の司書をしておられた副見恭子さん (第1図) によって発見され、同大学が買い上げたものである。それらは長らく放置されていたので痛んでいるものもかなりあり、それらの修繕・保管費用を集めるために副見さんが帰国されたことは、新聞やテレビなどで報じられ、御存知の方も多であろう。

昨年7月にアメリカのワシントンにおいて第28回万国



第1図 ライマン・コレクションを見る副見恭子氏。

地質学会議 (International Geological Congress) がおこなわれたが、筆者らはそれへの参加の機会に、マ大学のライマン・コレクションを見ることができたので、以下に紹介する。

御案内いただいたマサチューセッツ大学顧問副見恭子氏、同行していろいろ御討論いただいた北海道大学加藤誠教授に感謝する。また現地ではマ大学の Richard H. Minear 教授、司書の Linda Seidman さんにお世話になった。記して感謝の意を表する。

アマーストの町とマサチューセッツ大学

ライマン・コレクションを所蔵しているマ大学は、ボストン西方約110kmのところにある人口約3万人の小さなアマーストの町にある。周辺は、コネティカット川にそう平坦地で、緑豊かな肥沃な農業地帯になっている。この川はニューイングランド最大の河川で、流域一帯には大小多数の湖沼が発達し、まさに森と湖のなかの町である。

キーワード：お雇い外国人，ライマン，地質調査

1) 地質調査所地質情報センター

2) 地質調査所燃料資源部



第2図 マサチューセッツ大学アマースト校の28階建の図書館。この25階にライマン・コレクションがある。

ここへは、ボストンから高速バスで行くことができる。西方へ2時間ほどでスプリングフィールドという大きな町に着くが、この間は、森の間に湖沼が見えかくれる小高い山地で、ほとんどノンストップで走る。スプリングフィールドからはコネティカット川にそって平地を北方に走る。立派な農家が転々として、この地域の豊さを感じさせる。30分ほどで人口6万人ほどのノーザンプトンに入る。ここはライマンの生まれた町である。ここからコネティカット川をはなれ、北東方に20分ほど走りアマーストの町に到着する。町とはいっても、広い道路の両わきにひろがる林の中に点々と家屋が点在し、中心部の商店街もゆったりした建物が数10軒ならぶ程度の小さな田舎町である。

マサチューセッツ大学アマースト校は、2万4,000人の学部学生と大学院生を収容し、この町のはずれに大きなキャンパスをもっている。何10棟もの教室棟・実験棟など大学の建物が、ひろいキャンパスに点々と建てられていて、中に大きな池があり、水鳥が遊んでいるといったのんびりした環境である。後方は森でかこまれ、前方には運動場や駐車場が設けられている。

大学の中心に28階建ての総合図書館があり、その25階にライマン・コレクションは収蔵されている(第2図)。周辺の建物はせいぜい4階くらい、我われの宿泊したゲストハウスでも10階位であったから、ひときわ目立つ建物である。

このマ大学は、かつて札幌農学校に赴任し、日本の若者に大きな影響を与えたウィリアム・スミス・クラーク(1826-1886)が初代の学長をしたことがある。当時はマ



第3図 ノーザンプトンにあるフォース図書館。ここにライマン・コレクションは寄贈された。

サチューセッツ農科大学とよばれていた。彼が日本からもち帰って植えた木が、今は大木になって校内にそびえている。彼の墓は、キャンパスから2 kmほどの西共同墓地にある。背後の桜の木によって容易にその場所がわかる。マ大学は現在、北海道大学と姉妹校の関係にあり、我われが行った時には、北大の交換学生が来ているとのことであった。なおマ大学は、アマースト校のほかには6,000人の学生をもつボストン校、医学部からなるウースター校がある。

このアマーストの町には、マ大学のほかに全米有数の秀才の集まるアマースト大学がある。この大学には、同志社大学の創立者新島 襄や無教会キリスト教を唱え、「キリスト教徒の慰め」などの著書で知られる内村鑑三がかつて学んだことがあるという。同大学のチャペルには新島の肖像画が正門右手に、内村の肖像画が学長室にかけられていて、第2次大戦中もはずされることがなかったという。

このように、アマーストは日本人にたいへん関係の深い町で、ライマン・コレクションがマ大学に収蔵されることになったのも、何か深い因縁を感じさせる。

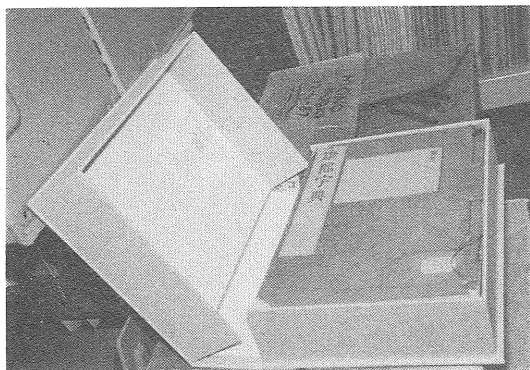
なお、20世紀になって高い評価をえるようになった女流詩人エミリー・ディッキンソン(1830~1886)は、この町に生まれ、一生を過ごした。その住居が町の中であり、名所の一つになっている。

ライマン・コレクション

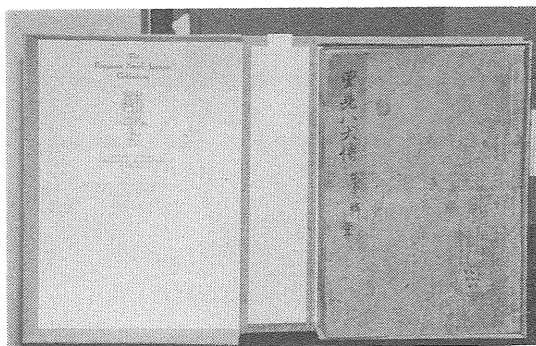
ライマンは、遺言によって彼の蔵書や書類を生まれ故郷のマサチューセッツ州ノーザンプトンにあるフォース図書館に寄贈した(第3図)。遺贈された時に図書館にならべられた写真が残されているが、大きな部屋に一杯になるような膨大なものであったことがわかる(第4図)。



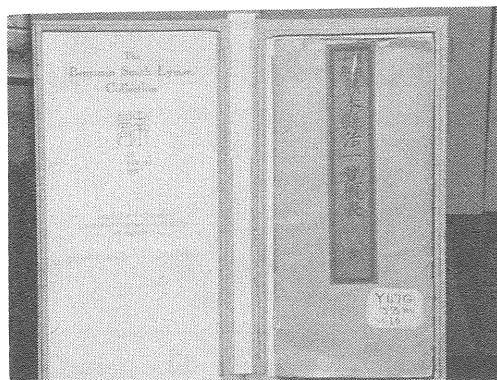
第4図 寄贈されたライマン・コレクション。



第6図 康熙字典。日本での復刻版。



第5図 滝沢馬琴の南総里見八犬伝。このような立派な箱に取められて収蔵されている。箱にはマ大学の蔵書票がはられている。



第7図 熊本県治一覧概表。各地に旅行して、ライマンはこのような資料を集めたという。

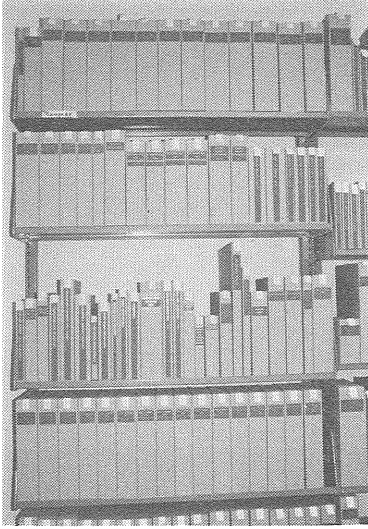
それらは蔵書票を付され、同図書館の蔵書のなかに散在していて、現在では一括したものと見て見ることができないのが残念であった。

遺贈されたもののうち、日本語の書籍などは地下室に、書簡・フィールドノート・会計帳等は屋根裏に保管されていたようである。副見さんは、1977年頃日本関係の資料がこの図書館にあるといううわさをきき、1979年に確認したとのことであった。

これらのコレクションのうち地質関係のものとしては

1. ライマン自身の著述、「北海道の地質調査」(4巻, 1875), 「日本の地質調査」(3巻, 1875)などで、後者は日本にもないという。
 2. 地質図やルート・マップ。この中には、北海道の炭田の6000分の1の地質図・断面図, フィールドノートに記されたルートマップを整理した地図などもある。
 3. フィールドノートなどである。
- 地質関係以外のものとしては
4. 言語・菜食に関する彼自身の論文

5. 日本語・中国語の図書約1600冊。この中には、北村季吟「湖月抄」(60巻, 1675), 吉田兼好「徒然草」(2巻, 1691), 滝沢馬琴「南総里見八犬伝」(初版40巻)(第5図)などがある。また漢字の辞書「康熙字典」(42巻)(第6図)もあるが、これは日本での復刻版とのことである。彼が訪れた土地の資料もある(第7図)。
 6. 欧文図書。このうち、ケンブラー「日本史」(1729), ロスニー「日本概説」(1872), アストン「日本語文法」(1877)などは貴重なものといわれている。
 7. ライマンの書簡の写し30冊。このうち8冊は日本滞在中のもの。この中には日本の弟子にあてた日本語の手紙, 地向斜説で有名なジェームス・ホールへあてたものなどもある。
 8. 会計帳, 受取証や彼自身の会計簿など。
 9. 写真。彼が滞在中の多くの日本の写真。
- 書籍を除く上記の資料は、重ねると12mにも達する。これらのうち図書は1980年、他の資料は1987年マサチューセッツ大学に買い上げられ、一括して同校図書館に保管されている。



第8図 ライマン・コレクションの日本語や中国語の図書の
収納状況。

これらは、半世紀以上も放置されてきたので、補修する
必要があり、そのために1987年副見さんは日本に帰られ、
資金集めに奔走された。当初は予期したほどの成果がえられ
なかったが、新聞やテレビなどにとりあげられ、予定した以
上の資金をえて、1988年初めにマ大学にもどられた。

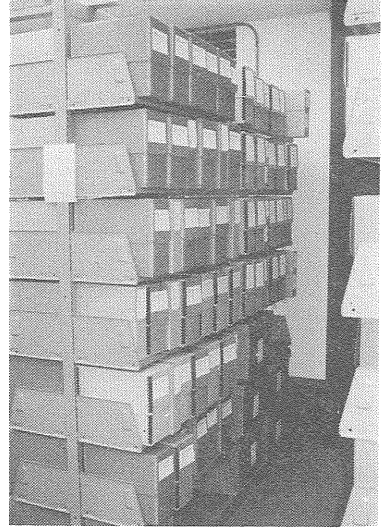
なお、マ大学がライマン・コレクションを購入するにあたっ
てもたいへんな御苦労があり、アメリカや日本はもちろん、
カナダやイギリスなどの著名な学者からの手紙が学長宛にあ
って可能になったとのことである。

コレクションの保存状況

ライマンの所有していた本は、たいへんに良く保存されて
いるように思われた。元もと、彼自身愛書家でもあったので
あろう。それらの本一冊一冊に、フォース図書館の蔵書票が
はられている。この蔵書票は和紙に刷られていて、中央に来
曼の字を配した、なかなかしゃれたデザインのものである。

現在は、淡緑青色の木箱におさめられている(第8図)。こ
の木箱は、マ大学で特別につくらせたもので、この箱には来
曼の字を中央に配した立派な蔵書票がはられている(第5、6、
7図)。それらが本棚にならべられてあったが、一部まだ木
箱におさまっていないものも残っていた。

フィールドノート・書簡類・会計帳等は、鍵のかかる特別
室におさめられている。それらは分類されて、紙の箱におさ
められて、書棚にならべられていた(第9、10



第9図 ライマン・コレクションのうち手紙・会計帳・フィールド
ノートなどの収納状況。図書とは別の鍵のかかる部屋に収納
されている。

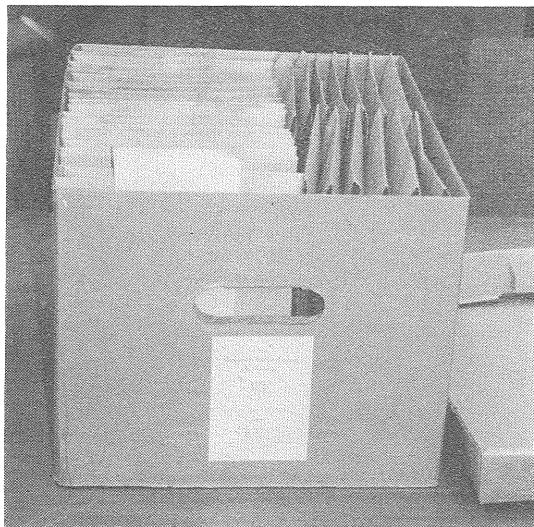
図)。

ここにはA0版位の紙にエンピツで書かれたルートマップ
をまとめた地図も保管されている。この地図には、フィールド
ノートの番号、ページが記されていて、地図上の位置とフ
ィールドノートのページを対照できるようになっている。新
潟・長野・静岡・奥州・大垣付近のものがあつたが、評
価のもっとも高い北海道のものは見あたらなかった。ライ
マン・コレクションの一部は、フィラデルフィアの哲学協
会に保管されていることから、それらは、同地に期待され
るとのことであった。

ライマンの住居

ライマンは、日本から帰国後2～3年して、ノーザン
プトンに立派な3階建の一軒家を買入れた(第11図)。前
には大きな道路が走り、斜め前方には立派な教会堂が建
つ緑豊かなゆったりした住宅街の中の一軒である。近く
には、奴隷解放に活躍したことで知られる人の住んだ家
もある。

このライマンの住居は、今はスミス女子大学の寮に使
われていて、2・3階は改装されているが、1階の大部分
は、ライマンの住んだ当時のままであるという。このス
ミス女子大学は、ライマンのいとこの Sophia Smith
によって創立されたが、現在は全米一の女子大学と評価
されている名門である。ライマン一族は、この地の素封
家で、数多くの名士を出しているとのことである。



第10図 フィールドノートなど調査資料の収納の様子。

私達が訪ねた時は夏休み中で閉じられていたが、特別に開けてもらい、内部を見学することができ、昔時の雰囲気を楽しむことができた。

あとがき

ライマンの業績については、かつて神保（1890）と坂（1890）との間に論争があり、それらは小林（1958）や柴崎（1984）によって紹介されたことがある。彼の地質学が実践的で優れたものであったことは、彼の育てた弟子の島田純一と山際永吾が幾春別と奔別炭田を、坂市太郎が夕張炭田を発見したことから推し量ることができる。しかし、ライマン関係の資料が日本に少ないこともあって、ライマンの業績の正しい評価は未だ十分になされていないと考えられる。

今回マ大学のライマン・コレクション中に、北海道の6000分の1の地質図を見る機会をえたが、彼と弟子達によってつくられた地形図上に描かれた地層境界線や地質断面図は、現在でも十分に通用する精度を感じさせるものであった。したがって、当時のわが国の地質家のレベルをはるかに越えるものであり、大学を出て数年の神保の及ぶところのものではなかったであろうと思われた。

当時の発展途上国日本へ来て、このような高精度の地質図をつくり、立派な弟子を育てえたのは、ライマンの高度な地質学の知識と技術、誠実な人柄、弟子への信頼があったことは想像にかたくない。さらに、彼のコレクションに見られる彼の幅広い知識もあずかって力があつたであろう。

1990年3月号



第11図 帰国後2～3年してライマンが住んだノーザンプトンにある住居。赤レンガの部分は当時のままといい。現在はスミス大学の寮として使われている。

現在日本は各国に技術援助をおこなっている。我われもライマンに学んで、それらを成功させる根本的な問題について考えなければならぬと考える。

ライマン関係の文献

- 安達仁造（1926） 来曼先生と古河市兵衛翁。石炭時報。
坂市太郎（1890） 神保君ニ質シ併セテ其教ヲ乞フ。地学雑誌，vol. 15, p. 147-148。
坂市太郎（1918） 北海道の開発と石炭鉱業。日本鉱業会誌，vol. 34, no. 403, p. 844-852。
今井 功（1966） 黎明期の日本地質学。193p., ラティス。
神保小虎（1890） ライマン説を論ず。地学雑誌，vol. 13, p. 7-11, vol. 14, p. 53-54。
賀田貞一君略伝。日本鉱業会誌，Vol. 31, no. 370, 1915年。
小林秀夫（1958） 日本地質学史断片。地球科学，no. 40, p. 21-27。
桑田権平（1937） 来曼先生小伝。
小野崎五助（1936） 桑田知明翁を追悼す。日本鉱業会誌，vol. 52, no. 614, p. 427-430。
佐川栄次郎（1921） ライマン氏を憶ふ。地質雑誌，vol. 28, no. 328, p. 40-55。
柴崎達雄（1984） 応用第四紀学への志向（論集）。東海大洋資源学科。
山際永吾小伝。日本鉱業会誌，Vol. 33, no. 385, 1917年。

<受付：1989年11月11日>